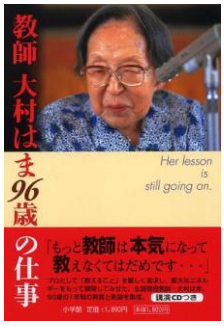
道標（みちしるべ）第306号

平成23年9月30日
校長　稲垣　達也

教師 大村はま　９６歳の仕事　①

学校便り１０月号で大村はま先生の言葉を掲載しましたが、今日の校内研で田中博之教授が、今の若い先生は大村はまを知らないのではないか‥、と、若干の不安がよぎりました。

大村はま



〈国語の神様　大村はま〉というフレーズはあまりにも有名です。73歳10ヶ月まで公立中学校の現職教諭であり続け、以後も25年間、2005年4月(98歳10ヶ月)まで「二十一世紀の国語教育」への提言を全国各地で続けました。

大村はま先生は、「戦後国語教育の最大の失敗は、“教えない”先生が増えたことです」と言い切ります。「子どもの個性尊重」の名に隠れて“プロとして教える”ことがおろそかになってしまったのではないか？　百人の子どもに百種の教材を用意する、そして人と比べられることのない「優劣のかなた」で真の力を身につけさせることを目ざして、ひたすら実践を磨いた方です。

優劣のかなたに　大村はま

優か劣か
そんなことが話題になる、
そんなすきまのない　つきつめた姿。
持てるものを　持たせられたものを　出し切り、生かし切っている
そんな姿こそ。

優か劣か、
自分はいわゆるできる子なのか　できない子なのか、
そんなことを　教師も子どもも　しばし忘れて、
学びひたり　教えひたっている、
そんな世界を　見つめてきた。

学びひたり　教えひたる、
それは優劣のかなた。
ほんとうに持っているもの　授かっているものを出し切って、
打ち込んで学ぶ。
優劣を論じあい　気にしあう世界ではない、
優劣を忘れて　ひたすらな心でひたすらに励む。

今はできるできないを　気にしすぎて、
持っているものが　出し切れていないのではないか。
授かっているものが　生かし切れていないのではないか。

成績をつけなければ、合格者をきめなければ、
それはそうだとしても、それだけの世界。
教師も子どもも　優劣のなかで　あえいでいる。

学びひたり
教えひたろう
優劣のかなたで。

道標（みちしるべ）第307号　平成23年10月3日
校長　稲垣　達也

教師 大村はま ９６歳の仕事 ②

【教室は学習そのものをやらせてしまう場所】

教室は，「やってごらん」という場所ではないのです。それをやらしてしまう場所です。「もっとよく読んでみなさい」「詳しく読んでごらん」，そういう場所ではなくて，ついつい詳しく読んでいた―そういう自覚もないぐらいに―詳しく読む必要があるのでしたら，その場で詳しく読むという経験そのものをさせてしまうところです。

「やってごらん」「できたか」これはもう禁句だと思います。やらせてしまわないとすれば，教師の方が，怠慢だった，教師のいたかいがなかったことになります。「こうこうですよ」「やってごらんなさい」「できましたか」「それじゃ，まだだめですよ」と，そんなこと言うために先生をしているのかと思います。

大村はま「教室に魅力を」（国土社）

【教室の魅力とは―どの子にも成長の実感があること】

教室の魅力は，力の弱い子どもを救うことでは半分しか生まれてこないと思います。

力の弱い子どもが張り合いよく学習していると同時に，力のある子どももいきいきとして学び，語り合い，豊かな力を出し切って努力している，頬をほてらせているようでないと，教室に魅力が生まれません。ところが，これは力の弱い子どもにやりがいを感じさせることよりむずかしいかもしれません。

大村はま「教室に魅力を」（国土社）

【生徒が目標を自然に達成するように教師は運ばないとまずい】

「そうさせたい」と思っていること，たとえば要点をはっきりとらえさせたいとか，はきはきと話させたいとかいう目標がございます。その目標が自然にできるように運ばないと困ると思います。

そうでなくて，要点をはっきりつかみなさいと言ったり，もっと生き生きと話しなさいと言ったり，もうちょっといろんなことを考えなさいとの，とか言うのは，全く知恵のないことだという気がします。

要点をつかませたいときに要点をつかまえるのですよと言うのはあたりまえすぎて，そういうの教師らしくない素人的なことという気がします。教師はもう少し知恵を出して「こうさせたい」と思うことを，気がつくと自然にやっている，自然に目標に達している，というふうに仕向けなければならないと思うのです。こう教えたいと思っていること，それが自然に身につくというのは，そういうことだと思います。それが，生活として教えるということだと思うのです。

大村はま「大村はま国語教室１１　国語教室の実際」（筑摩書房）

【仏様の指】

戦前にね，諏訪時代にしごかれた奥田正造先生が仏様の話をされたの。仏様がある時，道端に立っていらっしゃると，一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこはたいへんなぬかるみであった。 車は，そのぬかるみにはまってしまって，男は懸命に引くけれども，車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても，どうしても車は抜けない。その時，仏様は，しばらく男のようすを見ていらっしゃいましたが，ちょっと指でその車におふれになった。その瞬間，車はすっとぬかるみから抜けて，からからと男は引いていってしまった。指が触ったことを男は知らない。自分の力で抜いたと，思っている。そういうのが本当の教育というものだと。

大村はま「教えるということ」（共文社）

道標（みちしるべ）第308号　平成23年10月4日
校長　稲垣　達也

教師 大村はま ９６歳の仕事 ③

【へたな発表はさせない】

生徒の発表でへたなものがよくありますが，へたな発表などはさせるべきではないと思います。へたな発表しかできないのなら，聞く力をつけるための妨害になりますので，発表という形式をもう少し待つべきだと思います。そのクラスで今教えている子どもは，発表ということをするところまで成長していないということです。…まずい発表を，友だちがやっているのだから我慢して一生懸命聞くという教育もありますが，それはそれで別の目的だと思います。

大村はま「大村はま国語教室１１　国語教室の実際」（筑摩書房）

【思うようにならなくて当り前】

自分の思うようにならないとか，いくら教えても成果が上がらないとか，そういうことに教師は驚かないようにしたいと思います。一生懸命やれば必ず成果が上がるわけではないからです。思うようにならないのは当り前のことなのに，あれだけ教えたのにこんなだ…そういう失望のしかたが，教師の場合，少し大きいように思います。同じ時，同じ話を聞かせても，同時に同程度にわかったりできたりしなくても当り前で，驚くほうがおかしいのではないでしょうか。

もっと，人というもの，そういうものを本気で大きく見て，そこでは多くの努力がどんなにむなしく消え去っていくものか，報われることはいかに少ないかということを覚悟して，そんなことで自分を失わないようにならないと，人の子を育てることはむずかしいのではないでしょうか。

大村はま「教室をいきいきと１」（ちくま学芸文庫）

【魅了を失わない話し合い】

それから，話し合いのあと，全員が発言しなかったというお小言。こういうのは，非常に魅力がないと思います。普通のクラスみんなで話し合いをしているのでしたら，クラスのみんなが発言するということは，だいたいないのです。そういうことは，期待してはいけないこと。

そういうことではなくて，ほんとうに発言が偏って少なく，多くの子どもが話す内容もなく，したがって意欲もない，沈滞した空気になったのでしたら，それは，話し合いの事前の指導の失敗でありましょう。話したいことを，ひとりひとりにもたせられなかったということです。初めから言うことがないのでしたら，元気を出してと言われても中身がないのですからどうにもなりません。何も話す内容のない子どもがいるのに，話し合いの学習を始めることが，おかしいのではないでしょうか。考えがない人がそこに並んで，何を話し合うのでしょうか。

大村はま「教室に魅力を」

【教えるということ　読書メモ】

書き出しがかけないなら，少しかいてやって，この先かいてごらん…。かけない子は，先生が来て，何かしてくれるのを無意識に心から待っている。かかせられないのは先生の恥。下手な文章を書かせるのは指導者の責任。書くことそのものを教える。

一生懸命指導したのですが…。非常に甘えた言葉。専門家の言葉ではない。うまくいかない責任は自分でとれ。子どもは常に一人一人を見るべきである。束にしてみるものではない。教師は子どもを尊敬することが大切。宝物。この子は自分を遠く乗り越えて新しい日本を建設する人。

教師の禁句「静かにしなさい」。こどもは与えられた仕事が自分にあっていて，それをやることがわかれば，すばらしい姿になる。子どもの方は常に良きものをもとめてやまない。静かにさせるだけの計画案を持っていなかった。し，能力がなかっただけ。子どもが悪者なんてとんでもないこと。指導者という覚悟。仕事のできる人。

言ってもやらない人にやらせることが，こちらの技術。書く練習をしようと思ったら，まず書き表したいことを心に持たせること。まず自分が。

大村はま「教えるということ」（共文社）